

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 30回 雑感～ウソをつく動物

我が家に「チロ」という名の室内犬がいる。アプリコットのトイプードルで、もう、9歳半ばのおばあちゃんだが、親バカそのもの、全く「かわいい」の極みである。

チロにとって唯一のボスは、お父さん、つまり小生である。何時でもどこでも追ってきて、それはもう絶対服従、滅私奉公で文句一つ言わず 日本語話せない？ ボスに尽くし通す。こんな部下がいたらいいなあ...とは、いかにも筋違い。チロはただ只管尽くすだけの話である。

日本語話せないゆえ、チロはあらゆる手段を使って自分の意思をボスに伝えようとする。顔、泣き声、手足、尻尾...正に体中で情報を発信する。よく見るとその表情は大変豊かで、言葉だけがコミュニケーションだと思い込んでいる我々人間に、大きな試練を与えているように思えてならない。

この情報発信が、実に、正直そのものである。「好きだ嫌い、痛い疲れた、眠い遊びたい、もっと甘えたい」、全く感情そのものが意思表示として表現される。「都合が悪い、黙っていよう、隠しちゃえ、まずかった、やめたほうが得策、やばいかな？」こんな単語は無縁の世界。チロは嘘をつかない。嘘という言葉を知らない。イヌ語を翻訳するおもちゃがヒットする昨今、こんなものを使用せずとも、チロは十分なまでの情報を発信している。しかも全て、嘘のない情報である。

恐らく、人間だけが「うそ」を吐く。人間以外の動物は、きっとだれも、嘘を吐かないのだろう。人間は何故に、嘘をつくのだろうか？

「かっこよく見せたい」、「責任を逃れたい」...、そんな心理が根底にあるのだろう、でもそのままほっておくと、大きな罪になり、従って罰を科すシステムや社会規範を作らなければならなくなる。何とも複雑で、煩雑で、ややこしいコミュニティを創出し、維持していくこととなる。

チロの心理世界に行ってみたい...とは思わないし思えないが、純粹無垢で、無限の愛くるしさは、嘘を吐かない、嘘を知らない体質の表れなのかもしれない。人間って、本当に最高に賢い動物、生物界の長なのだろうか？

そんな、どうでもいい事を考えている時、「チロがいなくなったら、どうしよう」...、家内の正直な声が耳に飛び込んできた。「そうか、...」我が家もぼちぼち、アクティブシニア予備軍、ため息と同時に、急激に現実の世界に引き戻され、相も変わらず毎日仕事に没頭する、今日この頃である。